# COSSS report

Chuetsu Organization for Safe and Secure Society.

公益社団法人 中越防災安全推進機構　機関紙
2015　秋
VOL. 12

# 防災・減災社会の実現に貢献する未来志向のメモリアル施設

—まちからオープニングセレモニー—
かしわざき市民活動センター・中越沖地震メモリアル「まちから」がオープンしました。

contents

P2-3 特集
かしわざき市民活動センター 中越沖地震メモリアル まちから
2015年11月5日オープン！

P5 中越大震災11周年記念シンポジウム開催報告
P7 移住者受入れ滞在拠点整備助成事業の実施報告
P8 シリーズ4コマまんが「山古志の秋」

P4
茨城県常総市洪水災害ボランティア
ボランティアセンター運営やボランティアバス運行

P6　シリーズ防災教育の現場から
第5回 教職員向け中越メモリアル回廊周遊ツアー
P8 インフォメーション、施設のご案内、会員募集

# 特集：かしわざき市民活動センター 中越沖地震メモリアルまちからオープン

## 二度の震災を経験した柏崎から これからのまちづくりへの想いを伝えていく

### 大きな転機となった中越沖地震

二〇〇七年（平成一九年）七月一六日、新潟県中越沖地震が発生し、中越大震災から復興途上だった柏崎は三年も経たずに再び地震と向き合うこととなった。

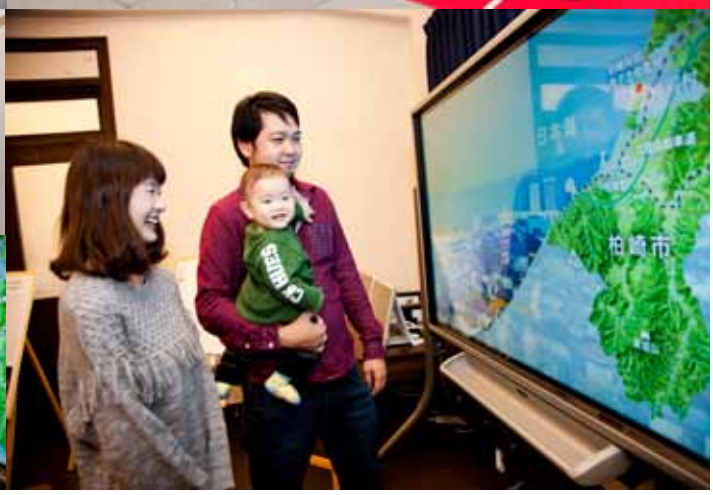
この地震によって柏崎は甚大な被害を受けたが、地震からの復旧・復興の過程で、地域コミュニティを中心とした市民の力がさまざまな場面で発揮された。新たにNPOやボランティアグループなどが立ち上がり、被災者へのサポート活動を行うなど、柏崎市が長く取り組んできた市民主体のまちづくりに強い絆が育まれ、スムーズな復興につながり、大きな成果を実感する機会にもなった。中越、中越沖と二度の被災によって柏崎の人々は多くの大切なものを失ったが、中越大震災を経験していたからこそ活かされた教訓があり、中越沖地震によって多くのことを検証することもできた。二度の被災から得た教訓は力強い市民力を醸成し、地域の見守り支援や復興に向けたその後の地域づくりに活かされていった。

### 文化財のリニューアル施設

「喬柏園（きょうはくえん）」は今から約八〇年前に、柏崎出身の実業家「高橋忠平（たかはしちゅうべい）氏」が、シンガポールで呉服屋を営んで財を成し、故郷柏崎の教育や社会活動のために私財を投じ、忠平氏の遺志を継いだサワ夫人からの寄付金により柏崎公会堂として建設された。喬柏園は新潟地震、中越地震、中越沖地震といった幾多の震災にも耐え、国の登録有形文化財に登録されている。この貴重な歴史的建物を「活用しながら保存する」ため、柏崎市は「まちから」の整備を行った。市民活動センターは市民が地域に愛着を持ち、これまで柏崎市で培われてきたまちづくりを主体的に進める力である「市民力」をさらに発展させるとともに、この市民力をキーワードとし、中越沖地震の経験と教訓を発信する「中越沖地震メモリアル」を併設して、これからのまちづくりの拠点となっていく施設としている。この「市民活動センター」と「中越沖地震メモリアル」の二つの機能を合わせた施設が「まちから」である。

### 中越沖地震と柏崎の市民力を紹介

かしわざき市民活動センター中越沖地震メモリアルまちからは、市民協働による復興のまちづくりをテーマに、二度の地震災害にも耐え、共に助け合い、共に歩んできた今までの道のりを振り返るとともに、次の災害に備えて、どのような地域づくりを進めていく必要があるの




か、そのヒントを探すための施設でもある。施設内で紹介される多くのエピソードは、柏崎市民の一人ひとりが実際に体験したこと、備えの大切さ、まちへの想いを伝え、訪れる多くの人にメッセージを伝えている。

## 柏崎を知る、中越沖地震に学ぶ

まちからの特徴のひとつ「学び」のプログラムも充実しており、体験者からの生の声による語り部の講話や、次世代を担う子供たちへの教育プログラムの開発も行っている。

語り部プログラムのメニューも多岐に渡り、住民コミュニティの分野では町内会単位での自治の仕組み、日頃からの備え、訓練のあり方などを実体験に基づいて紹介している。また、災害時に目の届きづらい在住外国人向けの支援の分野では、中越沖地震の対応から全国に柏崎モデルとして認められた多言語支援センターの現職の語り部から講話を聞くことができる。行政対応の分野では、被災直後の混乱の中での行政のあり方、災害支援物資の受け入れ、復興住宅の運営のコツなども紹介している。また中越沖地震でクローズアップされた企業被災についても、企業としての日常の備えの大切さと共にモノづくりへの柏崎のプライドを学ぶこともできる。

防災教育プログラムでは「中越沖地震の体験を次の世代の防災教育に活かそう」をテーマに、地階に整備されたシアターで災害発生から七二時間の様子や、復興過程で発揮された柏崎の市民力を学ぶことができる。またエピソードパネルを使った当時の市民の想いや、語り部プログラムと連動した市民の生の声を学びに活用できる。まちからにはワークショップや振り返りに活用できるオープンスペースを複数用意しており、施設全体を活用したプログラムの運営が可能となっているため、学校単位、クラス単位での成果発表や研究成果の展示などにも対応できる設備を備えている。

まちからでは「命と地域を大切に想う子供たちの育成」をテーマに、利用者の目的、用途に応じて実績豊富なスタッフが授業の支援を行いながら、学びのプログラムそのものの設計、運営にも協力できる体制を整えている。

かしわざき市民活動センター中越沖地震メモリアルまちからは、平成二七年一一月五日にオープンし、柏崎市内外を問わず多くの来訪者から利用していただけるよう準備を整えている。

（赤塚雅之）

# 「茨城県常総市洪水災害ボランティア支援」

## 災害ボランティアセンター出の活動

九月七日に発生した台風十八号に伴う豪雨は北関東を中心に各地に甚大な被害をもたらし、茨城県常総市では床上浸水四千四百棟、床下浸水六千六百棟と特に大きな被害となった。チーム中越では九月十二日より先遣スタッフ二名を派遣し現地調査を行った。当初は先遣調査を目的として被災地に入ったが、常総市災害ボランティアセンターの人員が手薄であった事もあり、急遽、運営スタッフとして支援活動を実施した。

九月十三日の朝に常総市災害ボランティアセンターが開設され、ボランティアの受け入れが開始された。開設から数日間は慢性的な渋滞、ボランティアを運ぶための車両の不足、備品の不足など制約がある中での運営であった。運営スタッフも各部署でのオペレーションに不慣れな事もあり混乱も見受けられたが、どの部署も徐々に改善を行いながら運営を行っていた。

運営上の課題として、シルバーウィーク期間中のボランティアの受け入れ体制が挙げられた。二千名を超えると思われるボランティアの受け入れをどの様に行うのか。平日でも深刻な渋滞が起きている状況下で、ボランティアを一か所に集中させるのは不可能に近い状態だった。また災害ボランティアセンターから作業現場まで人員を輸送するのに必要な車両が足りないなど様々な懸念があった。

シルバーウィーク前の二日間を利用して、シルバーウィーク中の受け入れ態勢の構築をスタッフが一丸となって行った。拠点を二か所増やし、本部を含めて三か所にする事でボランティアの集中を分散させる対策が実施された。

今までに私が経験した水害としては、長岡市乙吉地区の水害があるが、今回の常総市の水害との大きな違いとして、被災地域の広さが挙げられる。

今回の常総市の様に被災地域が広範囲になると、狭い地域では起こらなかった様々な課題が生じてくる。範囲が広くなれば、当然、ボランティアセンターから現地まで人員を輸送するのに多くの車両が必要となる。それらを収容するための駐車場や運転手、車両を誘導する交通誘導も必要になってくる。運転手に土地勘がなければ、現地に詳しい人に道案内ボランティアを頼む必要も出てくる。朝に三千人を超えるボランティアを送り出せば、当然それらを迎えに行く必要がある。夕方になり活動を終了したボランティアが一斉に迎えの電話をしてくると電話はパンクし、車両は足りなくなり、迎えが遅れてクレームの電話でさらにパンクする状況。私が活動していた車両班だけとってみても、これだけの課題が浮き彫りとなった。

平時であれば問題を一つ一つ順番に解決しながらオペレーションの最適化を図る事が可能ではあるが、災害時は今あるリソースを駆使してその範囲内で最善を尽くすしかない。不完全な状態ではあるが、絶えずＰＤＣＡ（※）を回し、解決を図りながら運営する事が必要となってくる。今回どのような問題をどう解決したか等の具体的なプロセスやノウハウの共有は、今後の災害ボランティアセンターの勉強会等で行って行きたいと思う。

## ボランティアバスの運行

十月二十九日にチーム中越では常総市にボランティアバスを運行した。今回は被災地の復興支援と供に、中越地域の二十代、三十代の若い世代に被災地での活動を通し、今後の災害対応や支援の形を考えていただく事も目的としていた。十六名の参加者は鬼怒川の越水現場付近で、民地内の泥かきや瓦礫の片付け、屋内の清掃活動等を行った。

今回、支援をさせて頂いた高齢ご夫婦の世帯は自宅の一階が被害を受けたため、今でも倉庫の二階で生活されていた。ここでは二名の女性が活動したが、清掃作業だけではなく、ご夫婦のお話を聞いて安心感をもってもらう事に心がけたという。

今後は、こういった長期的な被災生活に伴う心のケアも必要となってくる。災害ボランティアというと、力仕事や清掃作業といったイメージがあるが、被災者に寄り添い、お話を伺う事も重要なボランティア活動である。今後、災害ボランティアの募集を見かけた際には、あまり肩肘を張らずに、まずは参加してみる事から始めてみてはいかがだろうか。被災地にはあなたにしかできない支援が必ずある。

（地域防災力センター　井上賢太郎）

（※ＰＤＣＡ…Ｐ（Plan）・Ｄ（Do）・Ｃ（Check）・Ａ（Action）という事業活動の「計画」「実施」「監視」「改善」サイクルを表す。

# 「災害ボランティアが地域を変えた、地域が災害ボランティアを変えた」

中越メモリアル回廊では、震災から十年を経過した今年度から、新潟県中越大震災の復興を改めて振り返り、その記憶や記録を伝えていく事業を開始した。今年度のテーマは「災害ボランティアと地域」。災害ボランティアと被災者との関係性について考察し、その経験を次なる被災地へ繋いでいくことを目的としている。

これを受けて、四月から、各回廊施設のスタッフが一人ずつ研究員として調査を開始。この調査内容の更なる発展と研究員の活動内容の紹介の場として、去る十月二四日、災害ボランティアシンポジウム「災害ボランティアが地域を変えた、地域が災害ボランティアを変えた」が、長岡震災アーカイブセンターきおくみらいにて開催された。

まず、「災害ボランティアと被災住民はどう関わったのか?」をテーマに各スタッフが調査中間報告を十分間ずつ発表。各地域ごと(山古志、川口、小千谷)に、外部ボランティアと被災住民との関係や双方の意識の変化について報告した。きおくみらいのスタッフからは、災害ボランティアの変遷についての調査報告がされた。

研究員の中には、震災当時は中学生で、今年四月に初めてスタッフとして業務に携わるようになったという若手職員もいる。その視点は新鮮で、シンポジウム参加者の心にも響き、「今後の活躍に期待」との声も届いている。

続いて、この災害ボランティア研究会を監修していただいている関西大学社会安全部 准教授 菅磨志保先生から基調講演を賜り、「ボランティアが拓く関係性」について考察した。

菅先生は「新潟県中越大震災は、エポックメイキング(※)な出来事だった。外部から来たボランティアによって被災地域の意識に変化が起き、地域が拓かれたり、地域同士が繋がった。これは他の災害被災地にも刺激になった。」と指摘。

また、「災害研究においては、何が起こり、どう対処していたのか、現場でなければわからない事実を記述することはとても重要。未経験の方への知見になってくる。」ことや、これを「言語化することを期待する」と述べられた。

関西大学社会安全部 准教授 菅磨志保先生による基調講演

パネルディスカッションでは、当機構稲垣文彦による進行のもと、菅先生を交え「次なる被災地に向けて何を発信するべきか?」「災害ボランティアと被災住民はどう関わるべきか?」について議論。パネラーは、検証することの大切さや地域への愛着を再認識し、今後の活動への思いを新たにした。

調査・研究は引き続き行われ、来年三月十一日頃までに冊子にまとめ、全国に配信する予定である。

(おぢや震災ミュージアムそなえ館　髙野真弓)

(※エポックメイキング…ある事柄がその分野に新時代を開くほど意義をもっていること。画期的なこと。)

# シリーズ「防災教育の現場から」　第５回 教職員向け 中越メモリアル回廊周遊バスツアー

平成 25 年度末に完成し、新潟県下の小中学校および関係機関に配布された「新潟県防災教育プログラム」。これをきっかけに、学校教育現場での防災教育の取組みが定着し、継続して実施されるよう、学校や地域の実状に合わせた「自校化」に焦点を当て、県内の小中学校での先進的な取組み事例を、シリーズ「防災教育の現場から」として当機関紙で毎号紹介していく。

**実施概要**　○日時：平成 27 年 9 月 22 日（火・祝）　10 時～ 18 時　○参加人数：18 名（スタッフ含む）　○当日の行程：図を参照

平成一六年十月二十三日に発生した新潟県中越大震災。今年はその発生から早、十一年が経つ。防災教育の必要性が高まり、さまざまな実践事例が増えていく中、少しでも多くの教職員の方々に被災地を肌で感じていただきたいという思いから、このツアーを企画した。今回は、ツアー当日の様子をご紹介する。

まずは、長岡震災アーカイブセンターきおくみらいでの見学。シアターの映像や被災地の航空写真を見ながら、地震の被害から復興の軌跡を辿っていただいた。きおくみらいは、中越メモリアル回廊のゲートウェイとしての機能も持つ。震央である川口だけでなく、今回の周遊コースである山古志や小千谷の復旧・復興の様子などにも触れることができる。

バスに乗り込み、山間部の山古志へ。やまこし復興交流館おらたるでは、全村避難や避難所・仮設住宅での住民たちの苦悩を、地形模型シアターや展示パネルなどで感じてもらい、地域の復興へかける思いを、当時中学一年生だったスタッフが説明した。

またおらたる二階には、キッチンが完備されている。ここで長岡地域振興局地域福祉環境部の土田直美氏にご協力いただき、ポリ袋を使ったパッククッキング（真空調理法）にチャレンジ。ごはんとカレーをつくり、それを昼食としていただいた。洗い物も少なく、家にある身近なもので作れるため、すぐにでも学校の親子行事等で活用できると大好評であった。

その後は、山古志の被災地（池谷闘牛場→羽黒トンネルの斜面崩落→木籠の水没集落→山古志トンネル→芋川河道閉塞）をガイド付きで巡り、被災地や住民の復興にかける気概を肌で感じていただいた。

そなえ館では、地震発生から三時間、三日後、三か月後、三年後の被災地でそれぞれ何が起こっていたのか、展示を見ながら学ぶことができる。小中学校の受け入れも多いため、児童・生徒が来た時にどういう説明をしているかについても、併せてナビゲーターに案内してもらった。

最後に参加者から、ツアー全体をふりかえってもらった。被災地巡りや、災害食づくりなどを実際に体験したことで、学校や自治体単位での教職員研修への応用、教科学習での展開や、外部講師の活用などもしていきたいとの声があがった。しかし、子どもたちに伝えていくには、今日の学びを、今後どのように授業化・プログラム化していけば良いのか、という課題もあがった。

子どもたちの生きる力を育むには、教職員の方々の協力なしには到底成し得ないことである。防災教育を通して、子どもたちに「地域と命を大切に思う気持ち」を育むべく、今後もこのように教職員の方々と共に学びあう機会を持ちたいと考えている。

最後に、シルバーウィークのど真ん中であったにも関わらず、ツアーにご参加いただいた熱心な教職員の方々に厚く御礼を申し上げたい。

（地域防災力センター　関谷　央子）

# 移住者受入れ滞在拠点整備助成事業の実施報告

**中山間地域の集落等における、地域外人材活用（移住者、都市部からの通い、中長期のインターンシップの受入れ等）による地域づくりの推進のため、市民団体への助成を行った。**

（公社）中越防災安全推進機構では、平成 24 年度より「Ｉターン留学にいがたイナカレッジ」事業を実施してきた。同事業では、１年間、集落に住みながら地域団体に研修生という形で活動をする長期インターンシップ事業を行っている。これは人口減少が進む中山間地域の担い手対策であり、また地方志向のある都市部在住の若者に新たなライフスタイルを体感してもらう意図がある。昨年度は、８名が長期インターンシップに参加し、７名が中越地域に定住をした。

一方で、本年度より、首都圏の若者への働きかけを強化するために、東京に職員を派遣し、中越の魅力を発信する試みを実施する。その中で、いきなり１年間の体験移住をするのではなく、短期滞在のツアーや、２週間～１か月程度の滞在、東京に居ながらにして地方の地域づくりを実践するなど、多様な形での関わり方や移住に向けたステップがあることがわかってきた。

そこで当機構では、このような地方志向の強い若者のニーズに対応すると共に、その人材を地域の力に変えるための仕組みづくりを進める団体に対して、助成事業を実施することとした。

## ■助成事業概要

**〇助成金枠**

総額 80 万円

**〇対象となる団体**

①中越地域の市民団体。②移住等の外部人材獲得に向けた取り組みを「にいがたイナカレッジ」と共に進めていく意志のある団体。③助成金だけではなく、自主財源を合わせて環境整備を行う団体。

**〇資金使途**

①滞在拠点施設の整備に係る費用（民家・施設の改修）②人が短期～長期滞在するために必要な設備に係る費用（家電製品等）③外部人材が地域で活動するために必要な資機材に係る費用（軽トラ、農作業道具など）④コーディネート組織の初動期に係る費用（ＨＰ、パンフ、ＷＳ実施、研修への参加等）

**〇助成対象事業の実施期間**

2015 年８月～ 2016 年３月

## ■助成決定団体の紹介

**〇だぁ～すけ（柏崎市鵜川） 助成額 20 万円**

－助成金の使途：滞在拠点の整備の費用として駐車場舗装

－団体概要：鵜川地区の活性化を目的に、地域の環境整備活動、体験事業（味噌作り、ソバ打ち等）の開催、地域業の祭りに出店等の活動を行っている。２年前に、外部から訪れる人たちが宿泊できる場所、体験事業を行える場所として古民家を取得。

**〇荻ノ島地域協議会（柏崎市高柳荻ノ島） 助成額 20 万円**

－助成金の使途：滞在設備に係る費用として寝具や家電、家具を購入、また地域活動に係る費用としてデジカメの購入

－団体概要：茅葺き集落の「保全･再生･持続的振興（再生産）」に向けて、都市との様々な交流を行ってきた。これまで、５棟の茅葺き民家の屋根補修保全、地域おこし協力隊の受入れ、長期インターンの受入れを行ってきた。

**〇 yamakawa_sun（長岡市川口木沢） 助成額 20 万円**

－助成金の使途：滞在拠点の整備の費用として駐車場舗装、また滞在設備の費用としてストーブ等の購入

－団体概要：「山」や「川」という自然資源を活用し、将来にわたって遊び続けられる川口地域をめざしている。活動拠点となる「里山ハウス」の整備・経営、山・川の資源を学び遊ぶプログラムの実施をしている。今年度から長期インターンの受入れを行っている。

**〇岩沢アチコタネ―ゼ（小千谷市岩沢） 助成額 10 万円**

－助成金の使途：滞在拠点の整備としてトイレの改修

－団体概要：岩沢地区を“自然・文化・資源を共有する共同体＝郷”として捉え、地域資源の活用、交流、コミュニティビジネスを展開。現在都市部との交流事業を開催しており、その参加者の宿泊場所として、2018 年に農家民宿を開業予定。

cosss report VOL.12 – 2015 秋号 – 平成 27 年 11 月発行　発行／公益社団法人 中越防災安全推進機構　cosss report 編集委員会　新潟県長岡市大手通 2-6 フェニックス大手イースト 2F　TEL 0258-39-5525　FAX 0258-39-5526　E-mail info@c-bosai-anzen-kikou.jp http://c-bosai-anzen-kikou.jp/

## ≪インフォメーション≫

**【初チャレンジの茶道教室が終了しました！】**

川口きずな館の新しい試みとして、「連続して館に通うお茶教室」づくりに取り組みました。川口地域に茶道を広めたいという先生とスタッフで何度も内容を詰め、定着した生徒さん達が通う教室となりました。3 ヶ月の予定が、要望もあり 1 ヶ月延長に！「来春また再開したいですね」と言葉を交わしつつ、にこやかな最終日となりました。

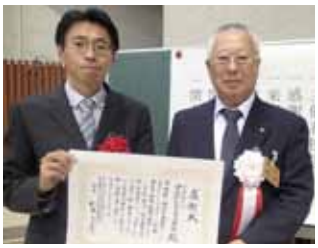
**【全国移住女子サミット 2015 ～地方を選んだ女子の新しい暮らしかた～】**

全国各地に移住した女子たちを集めた移住女子サミット開催します。移住へ一歩踏み出したい女子の皆さんへ向けた、地方で楽しく生き生きとした暮らしを実現してきた移住女子たちとの交流会です。

日程：12 月 12 日（土）／場所 the-c（東京）

詳しくは http://inacollege.jp/ijyu-joshi-summit/

**【長野県小谷村から感謝状をいただきました！】**



平成 26 年 11 月 22 日に長野県北部で発生した長野県神代断層地震において、当機構で現地支援チーム（9 名体制）を作り、長野県小谷村の災害ボランティアセンターの運営及び被災者支援を約 1 か月間に渡り継続的にサポートしました。その活動に対してこのたび、小谷村社会福祉協議会（会長は小谷村の松本久志村長）より感謝状をいただきました。

## ≪中越メモリアル回廊全体図≫

2015 年
11 月 5 日開館

中越沖地震メモリアル施設併設
**柏崎市民活動センターまちから**

旧公会堂の喬柏園（きょうはくえん）に市民活動センターと併せて整備され、地震の経験・教訓とともに、賑わいの再生に取り組む復興の町づくりを伝えます。

〒945-0066
新潟県柏崎市西本町 3-2-8
開館時間 9:30 ～ 21:00
メモリアル展示は 17 時まで
休館日 毎週火曜日 年末年始
TEL 0257-22-2003
FAX 0257-22-2007

**会員募集中！**

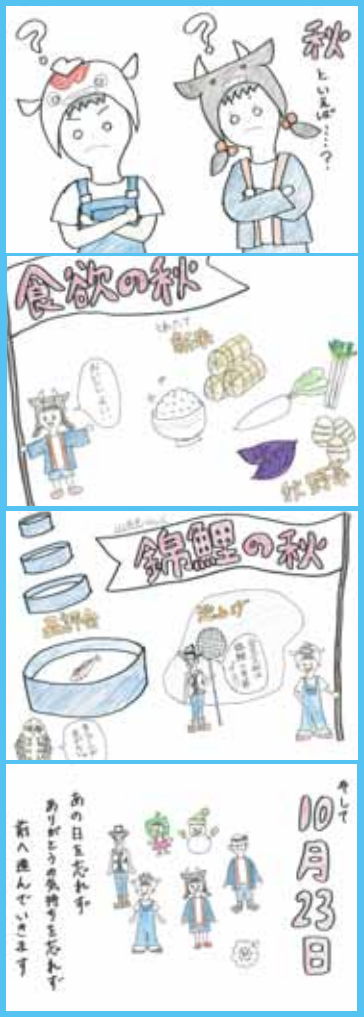
当機構では、地域防災への取り組みや被災地への支援活動に賛同し、応援して下さる会員の方を募集しています。皆様のご入会をお待ちしています。

参加資格：当機構の活動に関心のある 18 歳以上の方なら、どなたでも参加できます。
会員特典：当機構が主催する研修・講座・イベント等のご案内をいたします。
年会費　：正会員 5,000 円　個人賛助会員 3,000 円　団体賛助会員 100,000 円 ( 1 口以上 )
※申込書は当機構ホームページよりダウンロードできます。

公益社団法人 中越防災安全推進機構 機関紙 <COSSS report> 第 12 号 2015 年 11 月発行
発行人：諸橋和行　　編集：畔上凌　阿部巧　井上賢太郎　関谷央子　高野真弓　星野桂子　松井千明
〒 940-0062　新潟県長岡市大手通 2-6 フェニックス大手イースト 2F 長岡震災アーカイブセンタ - きおくみらい内
TEL：0258-39-5525　FAX:0258-39-5526
E-mail:info@c-bosai-anzen-kikou.jp　http://c-bosai-anzen-kikou.jp/

FREE

おらたるの看板娘がおくる
## やまこしの日常４コマ




まんがの作者

やまこし復興交流館
おらたる スタッフ
川上 沙織

## 施設のご案内

**長岡震災アーカイブセンター きおくみらい**
〒 940-0062
新潟県長岡市大手通 2-6 2 階
開館時間 平　日 10:00 ～ 18:00
　　土日祝 10:00 ～ 17:00
休館日 毎週火曜日 年末年始
TEL 0258-39-5525/FAX 39-5526

**おぢや震災ミュージアム そなえ館**
〒 947-0026
新潟県小千谷市上ノ山 4-4-2 2 階
開館時間 9:00 ～ 17:00
休館日 毎週水曜日 年末年始
TEL 0258-89-7480/FAX 89-7485

**川口きずな館**
〒 949-7503
新潟県長岡市川口中山 1441
開館時間 10:00 ～ 17:00
休館日 毎週火曜日 年末年始
TEL 0258-89-3620/FAX 89-3621

**やまこし復興交流館 おらたる**
〒 940-0204
新潟県長岡市山古志竹沢甲 2835
開館時間 9:00 ～ 17:00
休館日 毎週火曜日 年末年始
TEL 0258-41-1203/FAX 41-1204